

歳晚礼拝

2022年12月25日（日）

題 「イエスに出会った羊飼いい」

テキスト：ルカによる福音書2章8～20節

皆さん、おはようございます。

先週はクリスマス礼拝を捧げ、昨晚はクリスマスイブでロウソクの光のもと神さまの憐みと恵みを感じることができましたことを心より感謝しています。

今年は本当に内外激動の年であったように思います。コロナ禍や考えられないようなウクライナへのロシアの侵攻、旧統一教会の問題などなど苦しみ、嘆きと悲しみの年だったように思います。

今日は今年最後の主日礼拝をこうして捧げることを感謝しています。今日の聖書の箇所は、御子イエスの誕生を天使が野辺の羊飼いたちに知らせる有名な箇所です。クリスマスの出来事の中でも忘れられない箇所の一つです。教会のクリスマス祝会でも共に紙芝居を見ました。

聖書には「8:その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。」とあります。羊飼いは、昼間は野辺で羊を飼い、夕方からは囲いの中に羊たちを導きます。時には夜でも外で過ごすこともあったようです。羊飼いは、羊泥棒や野の野獣、オオカミなどから羊の群れを守らなければなりません。

命がけの厳しい仕事でもありました。

今から約2000年前のユダヤでは、羊飼いの仕事は、社会的に低く、多くの人がやりたがらない仕事の一つだったようです。しかし、旧約聖書では良い羊飼いは神さまを表しています。

この羊飼いたちに、御子イエスの誕生の知らせが一番に知らされたことに驚きと感動を覚えるのです。天と地を創られた神さまは、人が見向きもしない場所を覚えていてくださり、目を向けてくださっている方なのだとことを教えられます。

◆羊飼いと天使

「8:その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

9:すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼ら

は非常に恐れた。」 羊飼いたちは、最初天使たちの出現、世空を照らす光を見て、一体何のことかと恐れたのです。

恐れている羊飼いたちに、

10:天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

11:今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

12:あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

神の使いである天使たちは、喜びの知らせを、恐れている天使たちに知らせたのです。その喜びは民全体に関わる喜びです。「恐れと喜び」は、対象的に異なっていることですが、時に同時に起こることがあることを思います。神が介入された場面です。社会や地域や世界を変える喜びも、はじめは誰にも分からないことがあるのです。現実にはその方が多いのかもしれませんが。

「11:今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」メシアとは、救い主のことです。

その方は、主、つまり天と地をお創りになった方と等しい力を持つ方です。「あなたがたのために救い主がお生まれになった。」これがクリスマスの大きな出来事です。しかし、その世界を揺るがす出来事は、人々が気づかないかたちでひっそりと行われました。そのことも天使は羊飼いに告げています。

「12:あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」飼料桶の中に寝ている乳飲み子という形での救い主の誕生です。誰もそのことを信じる事が出来ないような形です。ただ、信じることはできなくても「しるし」はあるのです。「布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子」です。

ところで、ここでの「布」とは産まれたての赤ちゃんを巻いて包む布です。聖書を読んでいて今回この「布」ということばに目が留まったのです。赤ちゃんを包む布、布地については、わたしは無知なのですが、着やすいようにガーゼやネルで作られているとか。おそらく古代のこと、高価なものではなかったと思います。

この布について、最近、知人から外村吉之助（とのむら きちのすけ）さんのことを聞きました。ご存知の方もおられると思いますが、外村吉之助さんは日本の民芸運動家、染織家です。1898年（明治31年）に滋賀県五箇荘町に生まれ、成長され関西学院大学神学部を卒業されました。その後、手織物の創作活動に入られ活動を開始されました。後に日本民芸協会常任理事をされ、民芸活動に邁進された方です。後に倉敷市の倉敷民芸館の初代館長に就任されました。今も民芸館は美観地区にあります。わたしも倉敷で牧師として10年ほど働いていた時、美観地区は日々の散歩コースでした。わたしは外村吉之助さんには、

すでに召されていましてお会いしたことはありませんが私が働いていた倉敷教会員でもありました。お伝えしたいことは、外村吉之助さんの生き方についてです。それは彼の身なりにあわわられていたようです。「木綿往生」という言葉を良く口にしておられたようです。記された冊子があり、民芸館で求めて手元に持っていました。

その中で外村さんは「**木綿は人に優しく、最後は雑巾として仕え、役割を終る。人の生き方そのものである。**」と語っておられます。彼は、生涯を通して木綿の服、着物を身につけておられたようです。この事に中に、民芸精神というか、人の生き方、あり方が込められていたようです。人間としてキリスト者として、仕えて生きる姿勢と日常の中に美を見出し、民芸化としての外村さんの生き方に教えられる思いがしました。「木綿往生」。その精神は、主イエス・キリストの生き方にルーツがあるのではないだろうかと思われました。

「12:あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

ご存知のように、イエスさまは、人に仕え、神さまの限りない愛をどんな人にも分け隔てなく表してくださったのです。最後は十字架につき愛を全うされたのです。

長い歴史の中で地上に、このイエス・キリストの生き方にならう人たちが世界中に表れ、今日に至るまで広がっているのです。外村吉之助さんは、その一人であられたように思えるのです。わたしたちの日本にも、洲本教会の中にもそのような方々がおられることでしょう。そこに神さの据えられた希望があります。亡くならない消えることのない希望です。

神さまの希望は、主イエスにあっては、未来だけにあるのではなく、過去の歴史の中に輝いていることを覚えるのです。今を生きる私たちは、神さまから与えられる過去からの、そして未来からの希望に包まれているのです。そして生きるのです。

13:すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14:「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

15:天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

16:そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

17:その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

わたしたちも、イエスさまを知らされた者たちとしてイエスさまを知らせる者たりでありたいと思わされます。

主の平安を祈ります。